

本稿は「精神風土」をテーマにしたもので、採り上げた歴史やそこに登場する人物は風土の背景ととらえま  
した。従ってやや誇張気味に表現したところではありますが、ここで触れた歴史上の出来事や人物、その時系列  
はあくまで曲げずに、主としてWikipedia および松沢成文著の書籍から引用しています。

## 百段の坂上を、<sup>つわもの</sup>兵どもが夢の跡に終わらせない

「秀吉に攻められ、小田原から這う這うの体で八王子に逃げてきたんですよ」  
そう話すのは、僕がお世話になっているかかりつけ医のお母さんにあたるという 86 歳の老女医。今日は忙  
しい息子に駆り出され、決まった薬の処方程度は担当することになっている様子。

僕が小田原出身ということを知って、それまでの神妙な医者と患者の対応から、俄然僕の方へ座り直して、  
診察そっちのけの輝いた顔つきになって、今から 430 年前の話題となった。どうやら北條五代末裔の姻戚にあ  
たるらしい。そして、

「あの戦国時代に 100 年、下克上も無く民に篤く藩内の平和を保ってきた北條五代が自慢！」と云う。

恥ずべきことに、城跡に建った学校の出身者でありながら、僕は北條五代の自慢の何某も知らない蒙昧とし  
て、ひたすら話の内容に耳を傾げるだけで、びっくりし同時に恥ずかしい思いをしていました。

これまで僕は、生まれ育った郷土には、幾多の歴史の中で二宮尊徳翁のように語り継がれ、その土壌に滲み  
こんだ教訓が存在し、それをしっかりと学んでおくことによって、しかるべき素養や知恵が身に付いてゆく、  
それが精神風土でないかと知ったようなことを持論にしてました。現役時代、身を置いていた企業風土という  
ものが大事であると同じように。

ところが、郷土の何も知ったこと無く、馬脚を現したような格好になって、恥じるばかりとなりました。  
(柳川はそんなことも知らなかったのか？と叱られそうですが、大袈裟に「吾が矜持を正す」意味で書き進め  
ます断、ご容赦いただきたく)

♪大天地にそそり立つ♪箱根の山を背向いにて♪覇者の古城の跡に立つ…

「覇者」とは、徳というより武力や権力で天下を治める、という存在だと思しますので、決して対義語の「王  
者」(いや日本の場合、むしろ「名君」であろうか)とは程遠いイメージです。校歌のイメージそのままに、  
僕は北條家、特に早雲にはまさに「覇者」のイメージを抱いて、それ以上でも以下でもないと思い込んでいま  
した。いわゆる応仁の乱の頃から始まった「戦国時代」の梟雄だろうと。

僕が知る昔の話では、出自も判然としない早雲が、計略を以って至る先々でことごとく相手を屈服させてゆく武勇ばかりが有名でした。

したがって、最近知り得た早雲の功績にはびっくりするばかりです。

(早雲による小田原城奪取の意図や経過、関東進出、また後継者の活躍ぶりは歴史書に任せて、ここでは北條五代の礎を造った早雲の後世に残した自慢のいくつかに触れてみたいと思います)

早雲は、戦に明け暮れていた一方で、大きな災禍には一肌はおろか諸肌も脱いだようです。

特に、南海トラフといわれる推定 8.3 の巨大地震（明応地震）によって、紀伊半島から房総半島に至る広い範囲で大津波が発生し、多数の死者、幾多の堤防や河川の決壊で、天下が大混乱したと云われています。その際にとった早雲の行動は、被災者の救済に努め、荒れた田畑や治水にも手を差し伸べて民衆の支持を得たそうです。

(知恵者の早雲ならば、何度も起きる災害から治水など何らかの対策を得、さらに農地・領民の安定無くして我が身も無い自明の理を悟ったのではないかと、少し早雲を知った僕には容易に推測できます)

また、疫病が蔓延した時には、薬の調達や医者確保などにも努力したとあります。そうしたことが、領地を安定的に増やし領民の信頼を得ることに繋がったのでしょう。

ま、しかしこれほど未曾有の災害にもなれば、侠客でも一肌脱ごうというもの… (と、これまでは) 失礼にもそれほどの誤解をしました。

### 覇者から名君になった

ですから僕は、虎ががっちりとするデザインろくじゅおうおんの「禄壽應穩の朱印」を以って領民政策を行なったということを知るに至って、前出の災禍時にとった早雲の行動は伊達ではなかったと分かって、嬉しい衝撃を受けました。

あらためて、「禄壽應穩の朱印」。

「禄」は財産、「壽」は命。「應」はまさに(=確かに)、「穩」は穩かに(=つつがなく)。この四文字は領民の命・財産を守るという約束事です。これぞ、まさしくいつの時代でも求められる究極の政治理念。この朱印にはあたかも約束事を守るがごとく、虎の絵が印の上部に置かれて睨みをきかせています。当時、群雄割拠する有力者による上納金や土地がらみの文書が入り乱れて出回り、非常な迷惑を被っていた領民は、平定した早雲の睨みをきかせた朱印が押された公文書と



虎といえば、なるほどトラに見えますが、原判の絵の出来はあまり良いとはいえません(柳川画)

なって統一され、救われたとあります。

この朱印は、ハンコ社会の先駆けともいわれ、北條五代 100 年に亘って使われたといえます。

後の織田信長は「天下布武の朱印」を用いますが、比叡山全山焼討ちや一向一揆焼殺の行状と重なって、意図した意味合いとは異なる、天下を武力で以って制するというように捉えられ、早雲とは対極のイメージです。

「禄壽應穩の朱印」を知って、僕は我がことのような誇りを覚えました。誇りとすることは他にもありました。

小田原城奪取の前、伊豆を平定して先ず税制の見直しに着手した際、それまで課されていた重い年貢米を破格に軽くしたことで、有力な国衆や領民が早雲に帰順したそうです。当時は、兵農分離が曖昧だったため、いざとなれば武具を身にまとう農民にも同等の配慮をすることは、今後の展開を頭に入れている早雲にとって、至極当たり前のことであつたと思われまふ。

他に、領民にとっての徴税の基礎資料となる検地を先駆けて行ない、同時に役人の負担も見える可して、不公平感を無くするようにしたり、凶作や飢饉の年の減税など、いわゆる「撫民思想」に基づく民政に手を染めたと云われています。

ここで「撫民思想」について、注釈が必要です。当時を触れる場合によく使われる表現ですが、早雲とその後の北條が取り組んだ領民政策は、もう少し進んだ経営のレベルにあつたのではないかと、僕は推測します。食料の中心となる田畑の灌漑用水や治水工事には莫大な人力や費用が生じます。その後の城下町に張り巡らされた石組みの水道なども合わせて考えますと、「撫民」ではなく、統治する者も領民も一致協力した近代的と云つてもよいほどの政治が必要で、そのレベルに達していたからこそ、五代 100 年であつたと思ひます。

### 早雲の家訓が家内・領内をまとめ、戦国時代には例の無い平和を保てた

早雲は晩年に子孫に向けて、戦国時代を生き抜くための家訓「早雲寺殿廿一箇条」を残しています。

日常生活の細かな内容…神仏の信仰、早寝早起き、戸締り防犯、長幼の序、礼節、虚言の禁止、文武両道などを具体的に、子供にも解かりやすく手ほどきしています。

これなら幼な心にも根づくでしょう。この家訓がそれからの北條の代の綱紀肅正に活きたはずで。

実子に順繰りに譲って継いで、五代目の最後の最後にいわゆる「小田原評定」で結論が出ずチームワークが乱れて、秀吉軍の前に潰えましたが、五代 100 年のまさにタスキを繋ぐ駅伝でした。家訓はその規律を貫くものだったと思ひます。

こうして小田原本城を中心に、関東一円に 120 余りの支城や砦でネットワークを構成しながら、北條は戦乱

の世に領民を大事にし、下克上や裏切りも一揆も無く続けてみせたんですね。

誇りとすべき心構えや教訓が詰まった時代でした。

そして、校歌の「跡に立つ」とは、小田原城の背面に当たる最後の砦、いわゆる「詰め城」の在った八幡山に我が母校が建った、ということです。

遅ればせながら、それを知った時、

百段の坂上に立ちて夢は往時を駆け巡る、思いに至り、何の感懐も無くただ通った学生時代にいささか勿体無い悔いが残りました。

.....

さて、北條五代が終わって430年、小田原の今は様変わりとなりましたが、兵どもが夢の跡に終わらせたくない思いです。先人の遺訓がその風土のバックボーンの一つになるのだと考えると、北條五代の功績や教訓を忘却しないこと、その点で毎年恒例の五代祭りは意味があると思います。できれば、何が偉大であったのか、今に明日に生きる教訓のアピールが欲しいところです。

こうした先人が遺してくれたものを、忘れず学ぶことは改めて大事なことであり、知っておくべきでした。

ましてや、北條五代の城跡に建った学校の出ともなれば尚更で、矜持を正したいと思います。

そして、そのタスキを後世に繋いでゆくのが僕等、さらに後輩の役割になるのでしょうか。

.....

随分と大仰に述べてきましたが、僕は我が母校を「ふるさと」に例えていますので、「ふるさと」にそんなルーツがあったと知って誇らしい思いです。

話し変わりますが、なんと北條最中(モナカ)なるものがある、と妻が思い出したのです。小田原の老舗菓子舗・松榮堂さんで販売していたようで、ネットで調べてみると、確かにありました。しかも、包み紙に北条「虎朱印」と銘打ち、背景には「禄壽應穩」の朱印が印刷されています。

今度、かかりつけ医に伺う時には、ぜひ手土産にしたい。びっくりし喜ぶだろうなあ。